

日本推動縮短工時之做法

張瑞雄

國立高雄第一科技大學應用日語系

摘要

隨著工業化的進展，產生了工時問題。縮短工時是經濟發展的必然趨勢。日本雖然是舉世稱羨的經濟強國，然而在縮短工時成果上卻於先進國家中敬陪末座。

亞洲四小龍的台灣也有傲人的經濟成就，然而在縮短工時的成效上和日本一樣遲遲未見其成果。日本於1997年正式實施一週40工時的政策，且其總工時也由原本1987年的2168小時縮短為2000年的1859小時。

參考日本縮短工時之做法和經驗，我們可以了解其近年來獲致成效的主要原因有1. 政府有計劃性積極推行縮短工時政策。2. 政府主導修改勞動基準法 3. 勞資雙方共同協議努力縮短工時。並且在縮短工時的過程中，考慮到因應產業的不同需求，採取循序漸進，階段性，彈性式的做法以避免對產業界造成不良影響和衝擊。日本的經驗實足以作為今後台灣思考縮短工時課題之際的他山之石。

關鍵字：過勞死 縮短工時 週40小時工時制 彈性工時制 裁量工時制

Japan's Efforts to Shorten Working Hours

Rueih-shyurng Jang 張瑞雄

Japanese Department

National Kaohsiung First University of Science and
Technology

Abstract

With the advance of industrialization, there emerged the problem of working time. In this tide of economical development, it is necessary and inevitable to shorten working hours. However, Japan, as an economic giant, had failed to do so and was lagged behind from other developed countries. Taiwan, as an arising economic power that presented amazing economic growth, also showed a similar case in shortening working time. Recently, this situation was changed in Japan: The policy of working 40 hours per week was launched. As a consequence, the total working hours was reduced from 2168 (in 1987) to 1859 (in 2000). After an investigation of Japan's experiences and policies in shortening working time, we found out the following factors that had helped to promote this success. First, the government planned ahead and then promoted the realization of the plan with a zest. Secondly, the government took the initiative to change national labor law. Finally, the owners and the workers worked together to negotiate the terms of shortening working time. In the process, the individual needs of different industries were taken into consideration, and the shifting was gradual, step by step, and flexible, for fear that the change might harm and strike any industry. The Japanese efforts in these aspects can serve as an example for Taiwan.

Key words: death of fatigue, flexible working hours, flexible time system

労働時間短縮の推進策—日本の経験を中心に

張瑞雄

高雄第一科技大学応用日語系副教授

はじめに

歴史的に振り返って見ると、産業革命が進んだ 19 世紀の前半には機械性大工業における長時間労働の弊害が目立ち始め、イギリスを始め西欧諸国では、工場法を制定して女子および年少者の労働時間を一定の「標準労働日」の枠内に制限する動きが始まった。先進国では、労働時間については、1 日あるいは 1 週間の労働時間の最高限度を国が強行法規によって制限するのが普通である。

産業化の進展とともに労働時間の短縮が実現するのが先進諸国の一般的傾向であるにもかかわらず、日本は世界の経済力を誇りながら、逆に労働時間を無制限に延長していった。早出・残業・休日出勤や、手当なしのサービス残業を行い、残業が規制されれば仕事を自宅に持ち帰るのが日本のサラリーマンである。日本の労働者が「自発的」に死ぬまで（いわゆる過労死）所属する企業のために働くということは、まさしく資本にとって理想的な事態であり、マルクスすら到底予想できないことであった。そのため、国際社会の日本人の「働き中毒」に対する批判を緩和するために日本政府でも 1997 年 4 月 1 日から週 40 時間労働制が施行されることに踏み切った。

ところが、最近台湾では労働基準法制見直しの動きの中でとくに労働時間問題（労働基準法 30 条の改正によって 2001 年 1 月 1 日より 2 週 84 時間労働制の実施）に対する関心が高まり、数多くの論争がなされている。労働時間の短縮が、単に労働政策の重要な課題だけでなく、企業経営や経済発展に対しても大きな影響をもたらしていることとなっている。

本稿は、主に①日本の労働時間短縮の経緯②労働時間短縮の推進策と課題、という 2 つの問題に焦点を合わせ検討してみたい。とくに戦後日本労働時間の制定と改正を軸に、労働時間の短縮と弾力化についての課題は今後重要なポイントになっていくであろうこと

を示し、これまでの短縮の経緯を踏まえた上で、労働時間短縮推進のやり方ならびに今後の動向について分析する。